



神奈川県漢詩連盟創立15周年記念

わたしの好きな漢詩

令和三年アンケート結果

わたしの好きな漢詩 アンケート結果

二〇二一（令和三）年、神奈川県漢詩連盟は結成十五周年記念行事の一つとして、会員に、あなたの好きな漢詩を1位から3位まで、簡単な理由を添えて挙げてください、というアンケートを行いました。

その結果、46人の会員から回答が寄せられました。46人というのは予想よりかなり少なく残念でした。コロナ禍で対面の会合の機会が減り、アンケートの趣旨が十分浸透しなかったことと、ホームページから応募用紙をダウンロードして、メールに添付して送ってもらおう回答方法を中心にしたことが、主な原因ではなかったかと反省しております。

好きな漢詩の順位を見てみると、第1位は杜甫「春望」、第2位は李白「早發白帝城」第3位は王維「送元二使安西」と魏徵「述懷」となっています。

このように上位には有名な詩人の有名な漢詩が並び、順当な結果のように思われま
す。しかし今回のアンケートの特徴は、上位に余り人気が集まらず、回答者46人で名
前の挙がった詩が92首と非常に多く、人気分散したことでした。

そして中位から下位の詩を見ると、文学としての漢詩を扱った本ではほとんど見ること
のない、禅の偈や吟詠でよく詠われる詩がいくつも挙げられていることがわかりま

す。道元禅師の「山居」や網谷一才の「安宅關」、林羅山の「武野晴月」などです。

このアンケートを実施するにあたって参考にした、『石川忠久 中西進の漢詩歓談』

(大修館書店、2004) 掲載の「日本人の好きな漢詩(漢詩国民投票)」では、363人が一人最大3票を投じて、投票総数1,025票で、名前の挙がった詩は274首と、投票者数の数より少なく75%くらいになっています。今回のアンケートは先述のように、回答者46人で92首と、回答者の2倍で、人気が分散していることがよくわかります。

神奈川県漢詩連盟の会員には書道や詩吟の方が本来の趣味だという人も多く、文学的に有名であるかどうかより、本当に自分の活動に密着した「好きな漢詩」を挙げていただいたからこそ、このように裾野が大きく広がったのでしょう。神奈川県漢詩連盟会員の多様性をあらわしています。

またアンケートでは挙げられた詩のそれぞれに、好きな理由を書いていただきました。会員の皆さんの漢詩への多様な想いや思い出などが集まりました。

それらをすべて詩と一緒に、ここにまとめました。神奈川県漢詩連盟会員の愛読詩集です。どうかゆっくりお読みください。

(アンケート担当…山口 幸雄)

詳しいアンケート結果は次頁以降の表のとおりです。

順位	得点	詩題	作者	頁
1	16	春望	杜甫	10
2	10	早發白帝城	李白	12
3	9	送元二使安西	王維	13
3	9	述懷	魏徵	14
5	7	飲酒 其五	陶潛	16
5	7	江南春	杜牧	18
7	6	山行	杜牧	19
7	6	江雪	柳宗元	20
7	6	對酒	白居易	21
10	5	哭孟寂	張籍	22
10	5	五柳先生傳	陶潛	23
10	5	寒梅	新島襄	25
10	5	尋胡隱君	高啓	26
14	4	登高	杜甫	27
14	4	題烏江亭	杜牧	29
14	4	黃鶴樓送孟浩然之廣陵	李白	30
14	4	六月二十七日望湖樓醉書五絕	蘇軾	31
14	4	長恨歌	白居易	32
14	4	楓橋夜泊	張繼	33
14	4	靜夜思	李白	35
21	3	安宅關	網谷一才	36
21	3	九月十三夜陣中作	上杉謙信	37
21	3	勸酒	于武陵	38

順位	得点	詩題	作者	頁
21	3	後夜聞仏法僧鳥	空海	39
21	3	我愁從何來	高啓	40
21	3	步出夏門行其四	曹操	42
21	3	東欄梨花	蘇軾	43
21	3	廬山煙雨浙江潮	蘇軾	44
21	3	聞青森聯隊慘事	大正天皇	45
21	3	過目黑村	大正天皇	46
21	3	邊詞	張敬忠	47
21	3	山居	道元禪師	48
21	3	責子	陶潛	49
21	3	閑情賦	陶潛	51
21	3	春夜喜雨	杜甫	52
21	3	北征	杜甫	53
21	3	兵車行	杜甫	55
21	3	絕句	杜甫	57
21	3	月夜	杜甫	58
21	3	琵琶行	白居易	59
21	3	生年不滿百	無名氏	61
21	3	相見歡	李煜	62
21	3	秋思	劉禹錫	63
21	3	涼州詞	王翰	64
21	3	桂林莊雜詠示諸生	広瀬淡窓	65
21	3	月下獨酌	李白	66

順位	得点	詩題	作者	頁
21	3	把酒問月	李白	68
21	3	山中問答	李白	70
49	2	大東	(詩經·小雅)	71
49	2	田園樂	王維	72
49	2	青玉案	辛棄疾	73
49	2	夏夜示外	席佩蘭	74
49	2	春夜	蘇軾	75
49	2	己亥歲	曹松	76
49	2	挽歌詩	陶潛	77
49	2	紅畔獨步尋花	杜甫	78
49	2	九日齊山登高	杜牧	79
49	2	清明	杜牧	80
49	2	函山雜詠其四	夏目漱石	81
49	2	賣炭翁	白居易	82
49	2	過零丁洋	文天祥	84
49	2	去者日以疎	無名氏	85
49	2	平常心	無門禪師	86
49	2	臨洞庭上張丞相	孟浩然	87
49	2	題不識庵擊機山圖	賴山陽	88
49	2	送母路上短歌	賴山陽	89
49	2	樂遊原	李商隱	91
49	2	少年行	李白	92
49	2	春夜宴從弟桃花園序	李白	93

順位	得点	詩題	作者	頁
49	2	約客	趙師秀	95
49	2	春曉	孟浩然	96
72	1	感事	于濶	97
72	1	酌酒與裴迪	王維	98
72	1	鹿柴	王維	99
72	1	新稼娘	王建	100
72	1	回鄉偶書	賀知章	101
72	1	黃鶴樓	崔顥	102
72	1	將東遊題壁	釈月性	103
72	1	偶成	朱熹	104
72	1	胡笳歌送顏眞卿使河隴	岑參	105
72	1	圍碁	菅原道眞	107
72	1	望月懷遠	張九齡	108
72	1	歸去來辭	陶潛	109
72	1	貧交行	杜甫	110
72	1	無題 大正五年八月四日夜	夏目漱石	111
72	1	金州城下作	乃木希典	112
72	1	武野晴月	林羅山	113
72	1	雪梅	方岳	114
72	1	夏夜追涼	楊万里	115
72	1	馬詩	李賀	116
72	1	憫農	李紳	117
72	1	春夜洛城聞笛	李白	118

作者別順位

上掲の表を作者別に集計しました。詩人の総数は53人。うち日本人は13人です。

順位	作者	得点	順位	作者	得点
1	杜甫	38	30	(詩経・小雅)	2
2	李白	32	30	辛棄疾	2
3	陶潜	21	30	席佩蘭	2
3	杜牧	21	30	趙師秀	2
5	白居易	15	30	曹松	2
6	王維	13	30	文天祥	2
7	蘇軾	12	30	無名氏(文選)	2
8	魏徵	9	30	無門禪師	2
9	高啓	8	30	李商隱	2
10	大正天皇	6	39	于瀆	1
10	柳宗元	6	39	王建	1
12	張籍	5	39	賀知章	1
12	新島襄	5	39	崔顥	1
14	張継	4	39	釈月性	1
14	孟浩然	4	39	朱熹	1
14	頼山陽	4	39	岑参	1
17	網谷一才	3	39	菅原道真	1
17	上杉謙信	3	39	張九齡	1
17	于武陵	3	39	乃木希典	1
17	王翰	3	39	林羅山	1
17	空海	3	39	方岳	1
17	曹操	3	39	楊万里	1
17	張敬忠	3	39	李賀	1
17	道元禪師	3	39	李紳	1
17	夏目漱石	3			
17	広瀬淡窓	3		日本人	
17	無名氏(文選)	3			
17	李煜	3			
17	劉禹錫	3			

第1位 春望（春望） 杜甫

國破山河在 国破れて山河在り

城春草木深 城春にして草木深し

感時花濺淚 時に感じては花にも涙を濺ぎ

恨別鳥驚心 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火連三月 烽火三月に連なり

家書抵萬金 家書万金に抵るあた

白頭搔更短 白頭搔けば更に短く

渾欲不勝簪 渾べて簪に勝たえざらんと欲す

上田尤子①「人の世は転変するが自然の山や川は少しも変わらない。その表現に魅力を感じる。」

バル①「首聯が素晴らしく、芭蕉の奥の細道にも引用があるし、対句も素晴らしい。好きで

詩吟でよく詠じるため。」

小林迪雄① 「社会生活に不器用な杜甫が絶望の中、家族を思って詠った、心うたれる詩。」

声に出して読みたいNo.1の詩。」

小山洋三郎① 「哀愁、溢れる。」

高津有二② 「最初の2句を知らぬ日本人はいない。」

何度空んじても飽きない五言律詩」

山口幸雄② 「わたしは戦後の生まれだけれど、この詩にいつも日本の終戦時の風景を思う。」



杜甫

第2位 早發白帝城（早に白帝城を發す） 李白

朝辭白帝彩雲間 朝に辭す白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵一日にして還る

兩岸猿聲啼不住 兩岸の猿声啼いて住まざるに

輕舟已過萬重山 輕舟已に過ぐ万重の山

塚田倩子① 「舟旅の疾走感。」

上田尤子② 「千里と一日等を対比させるなど詩からスピード感が表現されている。」

鈴木正敏② 「李白の若い頃の代表作で、神漢連に入会后内容をよく理解し更に好きになった。吟ずるひとも実に楽しくなるヒトツ。」

愛知県犬山市にある、木曾川に面して白帝城と称する犬山城を度々訪問したことが懐かしいことも。」

うめむすび② 「三句目の猿の鳴き声が耳に残るような気持ちになります。」

山口幸雄③ 「これがスピード感。最近政治家がよく言う「スピード感を持って」とは違う。」

第3位 送元二使安西（元二の安西に使用するを送る） 王維

渭城朝雨浥輕塵 渭城の朝雨輕塵を浥^{うる}おす

客舍青青柳色新 客舍青青柳色新たなり

勸君更盡一杯酒 君に勸む更に尽くせ一杯の酒

西出陽關無故人 西のかた陽關を出づれば故人無からん

高津有二①「中国版「星影のワルツ」

詩吟の会以外で一番吟じた漢詩。

3年前の中国漢詩ツアーで、陽関遺跡の前で独吟したのは一生の思い出となった。」

鈴木正敏①「高校時代に最初に出会ったヒトツ。詩の内容も十分に理解せず、大声で歌ったのが懐かしい。

社会人になってからも、昔は聴く機会が度々で、自信を持って歌えた嬉しい記憶もあり。」

森谷正彦①「遠隔の地に赴任する友人を、励ましているとも慰めているともとれる詩。友情の深さを感じる。」

第3位 述懷（述懷） 魏徵

中原還逐鹿 中原還た鹿を逐う

投筆事戎軒 筆を投じて戎軒を事とす

縱横計不就 縱横計りごと就らざれども

慷慨志猶存 慷慨志猶お存す

杖策謁天子 策に杖って天子に謁し

驅馬出關門 馬を驅って關門を出づ

請纓繫南粵 纓を請いて南粵を繫ぎ

憑軾下東藩 軾に憑って東藩を下す

鬱紆陟高岫 鬱紆として高岫に陟り

出沒望平原 出沒して平原を望む

古木鳴寒鳥 古木寒鳥鳴き

空山啼夜猿 空山夜猿啼く

既傷千里目 既に千里の目を傷ましめ

還驚九折魂 還た九折の魂を驚かす

豈不憚艱險 豈に艱險を憚らざらんや

深懷國士恩

深く国土の恩を懐う

季布無二諾

季布二諾無く

侯嬴重一言

侯嬴一言を重んず

人生感意氣

人生意氣に感ず

功名誰復論

功名誰か復た論ぜん

香取和之①「これぞ「詩は志を言う」（書経）であり、スケールの大きな詩である。

「人生感意氣 人生 意氣に感ず

功名誰復論 功名 誰か復た論ぜん」

は、至言である。

これぞ男の立志、生き様という感。」

太上隱者①「唐の建国、貞観の治に活躍した人物の作であり、意気込みと誇りが感じられる。」

まさに、『唐詩選』の巻頭を飾るのにふさわしい作品である。」

竹窓②「詩は志を詠うものである。「人生意氣に感ず」という大きな夢を持った人生を送りたいものである。」

越山③「人生意氣」が好きだから。」

第5位 飲酒 其五（飲酒 其の五） 陶潜

結廬在人境 廬を結んで人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し

問君何能爾 君に問う何ぞ能く爾るやと

心遠地自偏 心遠ければ地自から偏なり

採菊東籬下 菊を採る東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

山氣日夕佳 山氣日夕に佳く

飛鳥相與還 飛鳥相与に還る

此中有眞意 此の中に眞意有り

欲辨已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る

牛山知彦①「引退後の心持ちを示し、その素晴らしさを教えてくれる。」

メイ・スズラン①「四句目「心遠地自偏」の表現が気に入っています。

心さえ世俗を離れていさえすれば雑音など気にならぬ。人間のあるべき真の姿でしよう。

私もこの様な気持ちになりたいものです。」

住田笛雄③「1. 市中にあっても隠者の暮しは出来ると云う姿勢に共感する。

2. 自然を感じ、その美しさを「弁せんと欲して言を忘る」との表現が素晴らしい。

3. 「酒」を表に出さず酒を詠む奥床しさ。」



陶潜

第5位 江南春（江南の春） 杜牧

千里鶯啼綠映紅 千里鶯啼いて綠紅に映ず

水村山郭酒旗風 水村山郭酒旗の風

南朝四百八十寺 南朝四百八十寺

多少樓臺煙雨中 多少の樓台煙雨の中

山口幸雄①「音読みの漢字が続く響きがいい…水村山郭酒旗風／南朝四百八十寺…」

K・A①「水墨画教室で詩意図を描いたことがある。」

安田茂③「漢詩が好きになったあまりにも有名な記念碑の句です。これは長江下流の江南地方、現在の江蘇省南京当たりの春の描写のようですが、神戸大学に学び、京都に魅せられて日本に帰化した石平氏によるとこの風景は文化大革命で殆どの寺は破壊され今は存在しないとの事です。彼は昔の江南の美しい景色は日本の京都に見事に保全されていると述懐しています。またそれが日本に帰化した理由の一つでもあったとの事です。我々はその日本に生活していることを慶びとして日本語に帰化した漢字を堂々と使って日本人として漢詩を楽しみたいと思います。」

第7位 山行（山行） 杜牧

遠上寒山石徑斜 遠く寒山に上れば石徑斜めなり

白雲生處有人家 白雲生ずる処人家有り

停車坐愛楓林晚 車を停めて坐そとろに愛す楓林の晩

霜葉紅於二月花 霜葉は二月の花よりも紅なり

室橋幸子①「分かり易い。美しい。色彩感ある。」

谷戸山民②「中学生の頃でしたか、兄の机の上に山行が記された教科書を見ましたが、その時は意味も解らず、題名だけが記憶に有りました。後年、詩吟で再会したときは鮮烈な「赤」に圧倒されました。」

バル③「白雲生と霜葉紅の取り合わせが素晴らしく、画に描きたくなる風景を思わせるところ。」

第7位 江雪（江雪） 柳宗元

千山鳥飛絶、
千山鳥飛ぶこと絶え

萬徑人蹤滅、
万径人蹤滅す

孤舟蓑笠翁、
孤舟蓑笠の翁

獨釣寒江雪、
独り釣る寒江の雪

新井治仁① 「叙景とはこうするもの」というインパクトが圧倒的。

「句頭の四字「千萬孤独」の技巧が有名だが、清冽な印象が残る感動がある。」

太上隱者② 「自分の置かれた状況、孤独のさみしさを、全く動く物のない風景の中で、独り釣り竿を垂れている漁夫の姿に、見事に心象投影した作品である。

最後に「雪」を出すことにより、全ての状況が分かる。「雪」の一字の重さは、他の十九文字を合わせたより重い。」

一沙鷗③ 「詩からせまる、静寂、無彩色の色彩が何とも言えず好きです。想像力の乏しい私でも、この風景の奥深い世界に引き込まれていきます。」

第7位 對酒 (酒に対す) 白居易

蝸牛角上爭何事 蝸牛角上何事をか争う

石火光中寄此身 石火光中此身を寄す

隨富隨貧且歡樂 富に随い貧に随い且く歡樂せん

不開口笑是癡人 口を開いて笑わざるは是痴人

住田笛雄② 「1. 人生かくあるべし、との一つの主張。

2. 大いにそうありたい、と云う共感。

3. 平易な表現の中に深い意味を感じさせる処。」

生駒祐子② 「小さな事で争ったり、くよくよしたりしないで、楽しく生きたいと思つたからです。」

香川龍② 「生き方のあるべき姿を語っている詩です。」

第10位 哭孟寂(孟寂を哭す) 張籍

曲江院裏題名處 曲江院裏 名を題せし処

十九人中最少年 十九人中 最も少年

今日風光君不見 今日の風光 君見えず

杏花零落寺門前 杏花零落す 寺門の前

駆けつけゾロ①「すでにこの世にいない同期の年下の友を哀れんで、一緒に過ごした当時の思い出を、杏の花が咲いた今、懐かしんでいる心情が切々と伝わってくる、悲しくもあり美しくもある作品です。」

武田利廣②「名詞化できない述語は転句の『不見』だけなので、リズムカルですぐ覚えらる。次韻の期待も抱かせてくれる。

進士合格発表という優雅とは言えない内容を扱っているが、零落する杏花は志かなわなかった幾多の受験生の悲しみでもある。」

第10位 五柳先生傳（五柳先生伝） 陶潜

先生不知何許人

先生は何許の人なるかを知らず

不詳姓字

姓字も詳かにせず

宅邊有五柳樹

宅辺に五柳樹有り

因以爲號焉

因て以て号と為す

閑靜少言

閑靜にして言少なく

不慕榮利

榮利を慕わず

好讀書

書を読むを好めど

不求甚解

甚だしくは解するを求めず

每有會意

意に会うこと有る毎に

欣然忘食

欣然として食を忘る

性嗜酒

性酒を嗜む

而家貧不能恒得

而れども家貧にして恒には得ること能はず

親舊知其如此

親旧其の此くの如きを知り

或置酒招之

或は置酒して之を招く

造飲必盡

飲に造らば必ず尽し

期在必醉

期するは必ず酔うに在り

既醉而退

曾不吝情去留

環堵蕭然

不蔽風日

短褐穿結

簞瓢屢空

晏如也

常著文章自娛

頗示己志

忘懷得失

以此自終

既に酔いて退くに

曾て情を去留に吝にせず

環堵蕭然として

風日を蔽わず

短褐穿結

簞瓢屢しば空しきも

晏如たり

常に文章を著して自ら娛しむ

頗る己が志を示す

懐いを得失に忘れ

此を以て自ら終る

五柳道人①「二十代の若い時に如何に生きるべきか悩んでいた自分の人生観と似ており、住んでいた家の周りに五本の柳を植えて、自分でも五柳と号をつけて陶淵明と同じ世界にいたいと思いに浸っていた。」

蔦清昭②「隠遁の詩は好むところなのだが、この作品の中の一語「不求甚解」に、芸術を受容する心情の一つのあり方として納得！」

(これは詩ではありませんが、投票があつたので収録しました。)

第10位 寒梅(寒梅) 新島襄

庭上一寒梅 庭上の一寒梅

笑侵風雪開 笑つて風雪を侵して開く

不爭又不力 争はず又力めず

自占百花魁 自ら百花の魁を占む

田川行雄①「指導者のあるべき心構えを、寒梅を使つて的確に訴えている。」

バル②「人間は苦勞してこそ実るものであると、梅によせてその教育觀に同感するた
め。」

第10位 尋胡隱君（胡隱君を尋ぬ） 高啓

渡水復渡水 水を渡り復た水を渡り

看花還看花 花を看還また花を看る

春風江上路 春風江上の路

不覺到君家 覺えず君が家に到る

武田利廣① 「水渡と看花という親和性の強い2字の繰り返しが心地よい。

五言の中に転句以外二つの述語がある。それ故名詞のみの転句が際立つ。

小さい頃、近くを流れる川を下っていくとどうなるのだろうかと歩いて行っただが、不安で戻ったことを思い出し、なつかしい。」

高津有二③ 「五言絶句の最高傑作と思う。」

生駒祐子③ 「流れるような詩の調べ、ゆったりのんびりした気分がとても心地良いと思いました。」

第14 登高(とうこう)

杜甫

風急天高猿嘯哀

風急に天高くして猿嘯哀し

渚清沙白鳥飛廻

渚清く沙白くして鳥飛び廻る

無邊落木蕭蕭下

無辺の落木蕭蕭として下り

不盡長江滾滾來

不尽の長江滾滾として来る

萬里悲秋常作客

万里悲秋常に客と作り

百年多病獨登臺

百年多病独り台に登る

艱難苦恨繁霜鬢

艱難苦だ恨む繁霜の鬢

潦倒新停濁酒杯

潦倒新たに停む濁酒の杯

住田笛雄①「1. 八句全対格、律詩中随一の美しさ。

2. 常に旅にあつて、病をかかえて老い行く心情に共感。

3. 「潦倒 新たに停む濁酒の杯」何れ自分もかくなるのか、と思わせるや切なる処。」

太上隠者③ 「七言律詩の最高峰と言われているように、完璧な作品で有り、置かれた絶望的な状況を見事に表現している。多くを語る必要は無い。」



杜甫

第14位 題烏江亭（烏江亭に題す） 杜牧

勝敗兵家事不期 勝敗は兵家も事期せず

包羞忍恥是男兒 羞を包み恥を忍ぶは是男兒

江東子弟多才俊 江東の子弟才俊多し

卷土重來未可知 卷土重來未だ知るべからず

高田宗治①「秦の時代も終わり、次なる時代を狙う楚の項羽と漢の劉邦と天下分け目の一戦は、我が国の西軍と東軍の関ヶ原の戦いを想起させる。いつの世でも龍虎の戦いは天のみぞ知るで、その勝敗は誰にもわからない。

これを天命とするか、人為とするかは異なれど、一命をかけて戦うはこれぞ男兒。名詩は心の奥底に沈む魂を再び呼び戻す不思議な力を持つ。」

小林迪雄③「この詩の舞台裏には楚の項羽と漢の劉邦が覇を競った「垓下の戦い」がある。

項羽の最後をしのび、私も「卷土重來」して欲しかった。」

第14位 黄鶴樓送孟浩然之廣陵 (黄鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る) 李白

故人西辭黃鶴樓 故人西のかた黄鶴楼を辞し

煙花三月下揚州 煙花三月揚州に下る

孤帆遠影碧空盡 孤帆の遠影碧空に尽き

唯見長江天際流 唯見る長江の天際に流るるを

三村公二①「この詩は送別の詩の絶唱といわれているが、何処にも「悲しい」「寂しい」といった字がない。にもかかわらず、大親友の孟浩然と二度と会えないかもしれないという悲しみが伝わってくる。唯、「遠影が碧空につき」「長江が天際に流れていく」のみなのである。」

うめむすび③「いつまた逢えるか分からない気持ち伝わってきます。」

第14位 六月二十七日望湖樓醉書五絶（六月二十七日、望湖樓に酔うて書す五絶）

蘇軾

黒雲翻墨未遮山 黒雲墨を翻して未だ山を遮らず

白雨跳珠亂入船 白雨珠を跳らせて乱れて船に入る

卷地風來忽吹散 地を巻き風来つて忽ち吹き散す

望湖樓下水如天 望湖樓下水天の如し

メイ・スズラン② 「二句目「白い雨粒が真珠をまき散らしたように」の表現が美しく素敵。

こんな表現したいです。」
掘端保聖② 「動詞が多いが、これによって躍動感が出ており、また色彩の変化の表現も巧である。」

第14位 長恨歌（長恨歌） 白居易

漢皇重色思傾國
御宇多年求不得
楊家有女初長成
養在深閨人未識
天生麗質難自棄
一朝選在君王側
迴眸一笑百媚生
六宮粉黛無顏色
春寒賜浴華清池
溫泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力
始是新承恩澤時
雲鬢花顏金步搖
芙蓉帳暖度春宵
春宵苦短日高起

漢皇色を重んじて傾國を思う
御宇多年求むれども得ず
楊家に女有り初めて長成す
養われて深閨に在り人未だ識らず
天生の麗質自ら棄て難く
一朝選ばれて君王の側に在り
眸を迴らして一笑すれば百媚生じ
六宮の粉黛顔色無し
春寒くして浴を賜ふ華清の池
温泉水滑らかにして凝脂を洗う
侍兒扶け起こせば嬌として力無し
始めて是れ新たに恩沢を承くる時
雲鬢花顔金步揺
芙蓉の帳暖かにして春宵度る
春宵短きに苦しみ日高くして起き

從此君王不早朝
承歡侍宴無閑暇
春從春遊夜專夜
後宮佳麗三千人
三千寵愛在一身
金屋粧成嬌侍夜
玉樓宴罷醉和春
姊妹弟兄皆列土
可憐光彩生門戶
遂令天下父母心
不重生男重生女

(以下略)

此れより君王早朝せず
歡を承け宴に侍して閑暇無く
春は春の遊びに従い夜は夜を専らにす
後宮の佳麗三千人
三千の寵愛一身に在り
金屋粧い成つて嬌として夜に侍し
玉樓宴罷んで酔つて春に和す
姊妹弟兄皆土を列ね
憐むべし光彩門戸に生ず
遂に天下の父母の心をして
男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ

香取和之②「玄宗皇帝と楊貴妃のロマンであり、前半はほぼ史実に則った物語であり、後半は空想の世界である。

何度読んでも、ロマンが掻き立てられ、またしみじみとする。」
室橋幸子②「物語がよくわかる。時代がわかる。面白い。」

第14位 楓橋夜泊 (楓橋夜泊) 張繼

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼いて霜天に満つ

江楓漁火對愁眠 江楓漁火愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外の寒山寺

夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲客船に到る

森谷正彦②「結句の「夜半の鐘聲客船に至る」が、面白い。」

小山洋三郎③「旅情、満載です。」

G3③「川面の船での宿泊。目にする漁船のいさり火、紅葉した楓、夜半を知らせる寺の鐘：異郷での情景が目には浮かび旅情をかき立ててやまない詩である。」

第14位 静夜思 (静夜思) 李白

牀前看月光 牀前月光を看る

疑是地上霜 疑うらくは是れ地上の霜かと

舉頭望山月 頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

五柳道人② 「十余年故郷に帰っていない。秋の夜中などに、眠れずにいるとこの詩をいつも思い出し、帰郷の念に駆られる。」

大野若人③ 「月光について、素朴な描き方をしている。望郷の思いを、簡潔に詠っている。」

田川行雄③ 「秋の夜に寢室の窓から山月を眺め、望郷の念が湧いてきたことを見事に表現している。」

第21位 安宅關（安宅関） 網谷一才

あみたにいっさい

知るも知らぬも 逢坂の

霞に包む 旅衣

露けき袖を 萎えらせて

ここは安宅の 関の中

朗朗讀終勸進帳 朗々 読み終る 勸進帳

打君吞涙金剛杖 君を打ち 涙を呑む 金剛の杖

誰忠臣莫動心情 誰か 忠臣の心情に 動かざるなし

此狀使人永不忘 此の状 人をして 長く忘れざらしむ

大村うさ太郎①「義経を守る弁慶の忠臣の心情が直に伝わり、自分自身もこの様な気
持ち・行動力を持ちたいと思う。」

第21位 九月十三夜陣中作 (九月十三夜陣中の作) 上杉謙信

霜滿軍營秋氣清
霜は軍營に満ちて秋氣清し

數行過雁月三更
數行の過雁月三更

越山併得能州景
越山併せ得たり能州の景

遮莫家郷憶遠征
さもあらばあれ家郷遠征を憶うを

越山①「本人の気持ちがかかるような気がする。」

第21位 勸酒（勸酒） 于武陵

勸君金屈卮 君に勧む金屈卮

滿酌不須辭 滿酌辭するを須もちいず

花發多風雨 花発けば風雨多し

人生足別離 人生別離足る

高橋純子①「漢詩を始めて一番最初に好きになった詩です。私は、親しい友との別れというものをまだ経験したことはありません。けれど、親しい友との別れを惜しみ、今世めてこの時間、酒と共に楽しまんとする切ないほどの情愛が胸をうちました。また、たった20字で、人生の儚さまでも詠うことのできてしまう漢詩の素晴らしさに気付かされた詩でもあります。」

第21位 後夜聞仏法僧鳥（後夜こや仏法僧鳥を聞く） 空海

閑林獨坐草堂曉 閑林独坐す 草堂の曉

三寶之聲聞一鳥 三宝之声は 一鳥に聞く

一鳥有聲人有心 一鳥声有り 人心有り

聲心雲水俱了了 声心雲水 俱に了了

竹村文孝①「私は日本人であり、日本人の漢詩が日本人の魂を表現され共感する。今回推薦した3詩とも、漢詩を知らない少年時代に耳にした日本の漢詩です。」
私は寺院に生まれ、父が吟じていました。」

第21位 我愁從何來（我が愁いは何より来る） 高啓

我愁從何來 我が愁いは何より来る

秋至忽見之 秋至れば忽ち之を見る

欲言竟難名 言わんと欲するも竟に名づけ難し

泯然聊自知 泯然（びんぜん）たるも 聊か自ら知る

汲汲豈畏老 汲汲として 豈老いを畏れんや

棲棲 〓 嗟卑 棲棲として 〓（なん）ぞ卑しきを嗟せんや

既非貧士歎 既にして貧士の嘆きに非ず

寧是遷客悲 寧んぞ是れ遷客の悲しみならんや

謂在念歸日 歸る日を念うに在りと謂わば

故鄉未曾離 故郷 未だかつて離れず

謂當送別處 別れを送る処に当たると謂わば

親愛元無 〓 親愛 元より 〓（はな）るるなし

初將比蔓草 初めは將て蔓草に比せしも

夕露不可萎 夕露も萎ます可からず

又將比煙霧 又將て煙霧に比せしも

秋風未能披 秋風も未だ披くこと能わず

（〓…揆の手へんの代わりに目）

（〓…言十巨）

藹然心目間
來速去苦遲
借問有此愁
於今幾何時
昔宅西澗濱
尚樂山水奇
茲還東園中
重歎草木衰
閒居誰我顧
惟有愁相隨
世人多自歡
遊宴方未疲
而我獨懷此
徘徊自何爲

藹然たり 心目の間
來ること速かに 去ること苦だ遅し
借問す 此の愁い有るは
今に於て幾何の時ぞ
昔は西澗の浜に宅り
尚お山水の奇なるを楽しみ
茲に東園の中に還り
重ねて草木の衰うるを嘆ず
閒居 誰か我を顧みん
惟だ愁いの相隨う有り
世人は自ら歡ぶこと多く
遊宴 方に未だ疲れず
而るに我れ独り此を懷き
徘徊して自ら何をか為す

二期生某①「全三十句の詩であるが、冒頭の四句「我愁從何來、秋至忽見之。欲言竟難名、泯然聊自知。」は時空を越えて西洋近代の象徴派詩人の意識に通じている。」

第21位 步出夏門行 其四 神龜雖壽（步出夏門行其の四神龜寿なりと雖も） 曹操

神龜雖壽	神龜は寿なりと雖ども
猶有竟時	猶 竟るの時有り
騰蛇乘霧	騰蛇は霧に乗ぜども
終爲土灰	終に土灰と為る
老驥伏櫪	老驥 櫪に伏せども
志在千里	志は千里に在り
烈士暮年	烈士 暮年に
壯心不已	壯心 已まず
盈縮之期	盈縮の期は
不但在天	但に 天のみに在らず
養怡之福	養怡の福は
可得永年	永年を得べし
幸甚至哉	幸 甚だ至れる哉
歌以詠志	歌ひて以て 志を詠ず

カン口伊勢原① 「14句からなるが、5句〜8句（老驥伏櫪〜壯心不已）が良い。」

第21位 東欄梨花（東欄の梨花） 蘇軾

梨花淡白柳深青 梨花は淡白にして柳は深青なり

柳絮飛時花滿城 柳絮の飛ぶ時花は城に満つ

惆悵東欄一株雪 惆悵す東欄一株の雪に

人生看得幾清明 人生幾たびの清明をか看得ん

一沙鷗①「前半は美しい絵画の世界。

後半は予期せず、ずしりと迫る「限りある人生」。

この対比が一際、胸に刺さります。

梨花と柳を、爛漫と咲き誇る桜、真つ青な空と置き換わって私に響いてきます。

此度の悪瘍の前にこのような想いを抱いたかたが多くいらっしやるかもしれません。」

第21位 廬山煙雨浙江潮

ろざん えんうせつこう
(廬山は煙雨浙江は潮)

蘇軾

廬山煙雨浙江潮

廬山は煙雨浙江は潮

未到千般恨不消

未だ到らざれば千般恨み消せず

到得歸來無別事

到り得て帰り来れば別事無し

廬山煙雨浙江潮

廬山は煙雨浙江は潮

香川龍①「人生の「欲」と「虚しさ」を解かりやすく妙に語っている詩です。」

第21位 聞青森聯隊慘事（青森連隊の慘事を聞く） 大正天皇

衝寒踊躍試行軍 寒を衝き 踊躍 行軍を試む

雪滿山中路不分 雪は山中に満ちて 路分たず

凍死休言是徒事 凍死言うを休めよ 是れ徒事と

比他戰陣立功勳 他の戰陣に功勳を立つるに比す

安田茂①「この漢詩は大正天皇が明治三十五年一月の青森歩兵第五連隊が八甲田山にて雪中訓練の際遭難し参加軍人二百十名中、生存者は十名のみと言う世界山岳遭難史上最大の慘事と言われた事件を悼まれ詠われたものです。

事件直後の輿論は軍の無謀として冷淡でした。しかしこの事件は嚴寒の地で戦端の危機が迫っていた日露戦争に備えたものであったことで当時の明治天皇が憂心慘慘、遺族には勅令を以って数々の慰靈行事を行われた史実に付いて大正天皇が慰靈に対して御製詩で「他の戰陣にて功勳を立つるに比す」と賛辞を贈られたものです。

この結句を以ってこの漢詩を第一位として選ばせて頂きました。大正天皇の御製詩は千三百六十七首に上ると言われておりこれらの御製漢詩はすでに立派な日本の漢詩で、これらを和語、和風と言う評価基準で評価はできないと考えております。」

第21位 過目黒村 (目黒村を過ぐ) 大正天皇

雨餘村落午風微 雨余の村落 午風微に

新緑陰中胡蝶飛 新緑陰中 蝴蝶飛ぶ

二様芳香來撲鼻 二様の芳香 来たりて鼻を撲つ

焙茶氣雜野薔薇 茶を焙ぶる氣は雜る 野薔薇に

大野若人①「二様」という茶とバラの香りが漂うという発想がいいですね。目黒村は戦後都市化が進むまで静かな農村、その様子を上手に描いておられる。歴代天皇のなかで最多の漢詩を作成されたそうだが、平易で率直な表現により良い詩が多いと思う。」

第21位 邊詞（辺詞）

張敬忠

五原春色舊來遲

五原の春色旧來遅し

二月垂楊未挂絲

二月垂楊未だ糸を挂けず

即今河畔冰開日

即今河畔氷開くの日

正是長安花落時

正に是れ長安花落つる時

蔦清昭①「中国書道の門を叩いて、最初に出された臨書課題であった。老師の中国語の朗詠、趙之謙の小篆、作品としての構成方式等初めて接する世界であった。この詩の情景描写、その背景が漢詩初心者に強い印象を残した。」

第21位 山居さんじ（山居）

道元禪師

我愛山時山愛主

われ我山を愛する時山主ぬしを愛す

石頭大小道何休

せきとう石頭大小道どう何ぞ休きゆうせん

白雲黃葉待時節

白雲黃葉時節を待つ

既抛捨來俗九流

既ほうしゃに抛捨きたし來る俗くりゆうの九流

忍冬①「率直で平明な表現の起句には国や民族や時代を超越して語り掛けてくる迫力があり、しかも詩志は清々しい！」

第21位 責子（子を責む） 陶潜

白髮被兩鬢 白髮兩鬢に被い

肌膚不復實 肌膚復た実たず

雖有五男兒 五男兒有りと雖も

總不好紙筆 総て紙筆を好まず

阿舒已二八 阿舒は已に二八

懶惰故無匹 懶惰故より匹たぐい無し

阿宣行志學 阿宣行くゆく志学にして

而不愛文術 而も文術を愛せず

雍端年十三 雍端は年十三

不識六與七 六と七とを識らず

通子垂九齡 通子九齡に垂なんなんとして

但覓梨與栗 但だ梨と栗とを覓もとむるのみ

天運苟如此 天運苟くも此の如くんば
且進杯中物 且く杯中の物を進めん

五嶋美代子① 「子どもの不出来を嘆いているかと思ったら、お酒を飲んでしまう、まあいつか、という気分が好き。」



陶潜

第21位 閑情賦

(閑情賦) 陶潜

願在衣而爲領 願はくは衣にありては領と爲り

承華首之餘芳 華首の余芳を承けん

悲羅襟之宵離 悲しいかな 羅襟の宵に離るれば

怨秋夜之未央 秋夜の未だ央つきざるを怨む

願在裳而爲帶 願はくは裳にありては帶となり

束窈窕之織身 窈窕の織身を束つかねん

嗟溫良之異氣 嗟かわしいかな 溫良の氣を異にすれば

或脱故而服新 或は故きを脱きぎて新しきを服きる

(この賦は長いので、有名な十願の部分の最初の二段のみ掲げます。)

石川閑生① 「人生論として。」

第21位 春夜喜雨（春夜喜雨） 杜甫

好雨知時節 好雨時節を知り

當春乃發生 春に當つて乃ち發生す

隨風潛入夜 風に隨つて潜かに夜に入り

潤物細無聲 物を潤して細やかにして声無し

野徑雲俱黑 野徑雲は俱に黒く

江船火獨明 江船火は独り明らかなり

曉看紅濕處 曉に紅の湿れる處を看れば

花重錦官城 花は錦官城に重からん

生駒祐子① 「私も好雨のような人間になりたいと思ったからです。」

第21位 北征（北征） 杜甫

皇帝二載秋

皇帝二載の秋

閏八月初吉

閏八月の初吉

杜子將北征

杜子將に北に征き

蒼茫問家室

蒼茫として 家室を問わんとす

維時遭艱虞

維れ時 艱虞に遭い

朝野少暇日

朝野 暇日少なし

顧慚恩私被

顧みて慚ず 恩私を被りて

詔許歸蓬葦

詔もて蓬葦ほうひつに帰るを許さるるを

拜辭詣闕下

拜辭せんとて 闕下に詣り

怵惕久未出

怵惕じゆつてきして久しうして未だ出でず

雖乏諫諍姿

諫諍の姿に乏しと雖も

恐君有遺失

君に遺失有らんことを恐る

君誠中興主

君は誠に 中興の主なり

經緯固密勿

經緯 固に密勿みつぶつたり

東胡反未已

東胡 反して未だ已まず

臣甫憤所切

臣甫が憤りの切なる所なり

揮涕戀行在

涕を揮って 行在を恋い

道途猶恍惚

道途 猶お恍惚たり

乾坤含瘡痍

乾坤 瘡痍を含み

憂虞何時畢

憂虞 何れの時か畢らん

(以下略)

板本旅石①「私は旅が好きです。詩聖杜甫の最高傑作と言われる「北征」は、七五七年鄜州に疎開させていた家族のもとに帰省した、旅行中の体験や見聞を描写し、その間の書簡を誠実に論述したもので、五言句百四十に及ぶ、杜甫が心血を注いだ労作です。」

第21位 兵車行（兵車行）

杜甫

車麟麟 馬蕭蕭

行人弓箭各在腰

耶娘妻子走相送

塵埃不見咸陽橋

牽衣頓足攔道哭

哭聲直上干雲霄

道旁過者問行人

行人但云點行頻

或從十五北防河

便至四十西營田

去時里正與裏頭

歸來頭白還戍邊

邊庭流血成海水

車麟麟 馬蕭蕭

行人の弓箭各腰に在り

耶娘妻子走りて相送る

塵埃にて見えず咸陽橋

衣を牽き足を頓して道を攔りて哭す

哭声直ちに上りて雲霄を干す

道旁を過ぐる者行人に問う

行人但だ云う点行頻りなりと

あるいは十五より北 河を防ぎ

便ち四十に至つて西 田を営む

去る時里正ためと頭こうべを裏み

帰り来つて頭白きに還た辺を成る

辺庭の流血海水と成るも

武皇開邊意未已

武皇辺を開く意未だ已まず

君不聞漢家山東二百州

君聞かずや漢家山東の二百州

千邨萬落生荆杞

千村万落荆杞を生ずるを

縦有健婦把鋤犁

たと縦い健婦じよりの鋤犁を把る有るも

禾生隴畝無東西

か禾はろうほ隴畝に生じて東西無し

況復秦兵耐苦戰

況んや復た秦兵苦戰に耐うるをや

被驅不異犬與鷄

驅らること犬と鷄とに異ならず

(以下略)

G3①「いつの世も戦争に駆り出された者と残された者との悲哀、国土は疲弊し何ら益することのない戦争。帰らざる者と残された者の慟哭が胸をうつ。

また時の政権に仕えながら玄宗の領土拡張政策を批判しても何らお咎めがない時代であつたことにも感動を覚える。」

第21位 絶句（絶句） 杜甫

江碧鳥逾白

江碧こうみどりにして鳥逾いよいよ愈よ白く

山青花欲然

山青くして花も然えんと欲す

今春看又過

今春みすみす看又過ぐ

何日是歸年

何れの日か是れきねん歸年ならん

うめむすび①「情景が浮かんできます。」

第21位 月夜（月夜） 杜甫

今夜鄜州月

今夜鄜州の月ふしゅう

閨中只獨看

閨中に只だ独り看るならん

遙憐小兒女

遙かに憐む小兒女の

未解憶長安

未だ長安を憶うを解せざるを

香霧雲鬢濕

香霧に雲鬢うんかん湿い

清輝玉臂寒

清輝に玉臂寒からん

何時倚虛幌

何れの時か虚幌きょこうに倚り

雙照淚痕乾

双ともに照らされて淚痕乾かん

堀端保聖①「誰もが同時に見ることができる美しい満月によって、遠方にいる妻子を想う作者の気持ちがよくわかる。」

第21位 琵琶行（琵琶行） 白居易

潯陽江頭夜送客

潯陽江頭夜客を送る

楓葉荻花秋索索

楓葉荻花秋索索たり

主人下馬客在船

主人は馬より下り客は船に在り

舉酒欲飲無管絃

酒を挙げて飲まんと欲するも管絃無し

醉不成歡慘將別

酔うて歡を成さず慘として將に別れんとす

別時茫茫江浸月

別るる時茫茫として江は月を浸す

忽聞水上琵琶聲

忽ち聞く水上琵琶の聲

主人忘歸客不發

主人は歸るを忘れ客は發せず

尋聲暗問彈者誰

聲を尋ねて暗かに問う彈く者は誰ぞと

琵琶聲停欲語遲

琵琶の聲は停み語らんと欲する遅し

（中略）

閒關鶯語花底滑

閒関たる鶯語花底に滑らかに

幽咽泉流水下難

幽咽せる泉流水下に難めり

冰泉冷澁絃凝絕

氷泉は冷澁して絃は凝絶し

凝絶不通聲暫歇

凝絶して通ぜず声暫らく歇む

別有幽愁暗恨生

別に幽愁と暗恨の生ずる有り

此時無聲勝有聲

此の時声無きは声有るに勝る

銀瓶乍破水漿迸

銀瓶乍ち破れて水漿迸り

鐵騎突出刀鎗鳴

鉄騎突出して刀鎗鳴る

曲終收撥當心畫

曲終り撥を収めて心に当りて画く

四絃一聲如裂帛

四絃の一声裂帛の如し

東船西舫悄無言

東船西舫悄として言無く

唯見江心秋月白

唯だ見る江心に秋月の白きを

(以下略)

谷戸山民①「漢詩作りの世界に入る前は詩吟の発声が稽古の中心でしたが、多くの名作を読むと詩吟の奥義を的確に説く。

この作品は漢字だけで五線譜表記を凌ぐ内容が驚異的で、特に「声なきは声有るに勝る」と絶妙な「間」を指摘された感じですよ。」

(この詩は長いので、冒頭と選者が推薦している部分のみを収録した。)

第21位 生年不滿百（生年百に満たず） 無名氏（文選）

生年不滿百 生年は百に満たざるに

常懷千歲憂 常に千歳の憂いを懷く

晝短苦夜長 晝は短くして夜の長きに苦しむ

何不秉燭遊 何ぞ燭を秉つて遊ばざる

爲樂當及時 樂しみを為すは當に時に及ぶべし

何能待來茲 何ぞ能く來茲を待たん

愚者愛惜費 愚者は費を愛惜し

但爲後世嗤 但だ後世の嗤いと為る

仙人王子喬 仙人王子喬は

難可與等期 与に期を等しくすべきこと難し

竹窓①「最近、人生百年といわれる。人生は楽しむべきであるということが、中国では南朝以前の昔から言われていたらしい。中国人の特徴を上手にうたった詩であり、中国の漢詩鑑賞の参考になる。」

第21位 相見歡 (相見歡) 李煜

無言獨上西樓

言なく独り西楼に上れば

月如鉤

月は鉤の如し

寂寞梧桐深院鎖清秋

寂寞たる梧桐の深院 清秋を鎖す

剪不斷

剪れども断れず

理還亂

理ととのうれども還た乱る

是離愁

是れぞ離愁

別是一般滋味在心頭

別に是れ一般の滋味 心頭に在り

佐藤三祿①「民族の至宝」詞の文化的価値の再認識を訴える鄧麗君の意気に共感、
「剪不斷，理還亂，是離愁」彼女の熱唱が耳に響いて来る。」

第21位 秋思（秋の思い） 劉禹錫

自古逢秋悲寂寥 古より秋に逢うて寂寥を悲しむ

我言秋日勝春朝 我は言う秋日は春朝に勝ると

晴空一鶴排雲上 晴空一鶴雲を排して上る

便引詩情到碧霄 便ち詩情を引いて碧霄に到る

前嶋彩江① 「二転句、結句」の見事さに感銘。

晴々とした空、空を切る一羽の鶴の綺麗な動きが鮮明に空想できる。吟じれば尚、気持ちがスカツとする事、文句なしの詩である。」

第21位 涼州詞（涼州詞） 王翰

葡萄美酒夜光杯 葡萄の美酒夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す

醉臥沙場君莫笑 酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫かれ

古來征戰幾人回 古來征戰幾人か回る

忍冬②「輕快で明るく、豪快な兵士の宴が結句において、一挙に戦の悲壮な現実を追認させる。篝火の下、美しい白玉の杯や葡萄酒の色を夜の闇に煌めかせる妖しさもドラマチックで魅惑的！」

塚田情子③「更に遠くへの旅。」

第21位 桂林莊雜詠示諸生（桂林莊雜詠諸生に示す） 広瀬淡窓

休道他郷多苦辛 道^いうを休^やめよ他郷苦辛多しと

同袍有友自相親 同袍友有り自ら相親しむ

柴扉曉出霜如雪 柴扉曉に出づれば霜雪の如し

君汲川流我拾薪 君は川流を汲め我は薪を拾わん

大村うさ太郎② 「私は脳卒中を発症し、入院し、退院後、身障者リハビリ会に参加した。その会長は、この「桂林莊雜詠」と一緒に合吟する矢先に亡くなられた。会長の故郷は豊後国日田と縁あり、その後何回も素読・独吟して会長を偲んだ。」

竹村文孝③ 「高校の朝礼で、校長が吟じ解説してくれたことをよく覚えています。」

第21位 月下獨酌（月下独酌） 李白

花間一壺酒

花間一壺の酒

獨酌無相親

獨り酌んで相親しむ無し

舉杯邀明月

杯を挙げて明月を邀え

對影成三人

影に対して三人と成る

月既不解飲

月既に飲を解せず

影徒隨我身

影徒らに我が身に隨う

暫伴月將影

暫く月と影とを伴いて

行樂須及春

行樂須らく春に及ぶべし

我歌月徘徊

我歌えば月徘徊し

我舞影凌亂

我舞えば影凌亂す

醒時同交歡

醒時は同に交歡し

醉后各分散

醉后は各分散す

永結無情遊

永く無情の遊を結び

相期猿雲漢

相ひ期して雲漢猿かなり

高橋純子② 「花で始まる詩、と覚えた詩。 月や自分の影を友として酒を飲む、自分の歌に合わせて月が彷徨う：など、発想の面白さと幻想的な世界に驚いた作品。宇宙にまで広がる世界観の大きさに引き込まれて、物語を読んだような読後感がある大好きな詩です。」

新井治仁③ 「イメージの雄大きさが「家飲み獨酌」を楽しいものにしてくれるから。」



李白

第21位 把酒問月（酒を把って月に問う） 李白

青天有月來幾時 青天 月有りて來のかた幾時ぞ

我今停盃一問之 我今 盃を停めて一たび之に問わん

人攀明月不可得 人 明月を攀じんとするも 得べからず

月行卻與人相隨 月行 卻つて人と相隨う

皎如飛鏡臨丹闕 皎として飛鏡の丹闕に臨むが如く

綠煙滅盡清輝發 綠煙 滅び尽くして 清輝発す

但見宵從海上來 但だ見る 宵に海上より來るを

寧知曉向雲間沒 寧ぞ知らん 曉に雲間に向いて没するを

白兔搗藥秋復春 白兔 藥を搗いて 秋復た春

姮娥孤棲與誰鄰 姮娥 孤り棲みて 誰と隣せん

今人不見古時月 今の人は見ず 古時の月

今月曾經照古人 今の月は曾經かって古人を照らせり

古人今人若流水

古人 今人 流水の若く

共看明月皆如此

共に明月を看ること 皆 此の如し

唯願當歌對酒時

唯だ願う 歌に当り酒に對するの時

月光長照金樽裏

月光 長えに金樽の裏を照さんことを

二期生某② 「全十六句の終りに近い箇所「今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看明月皆如此」の四句は、太古から連綿と続く人間の存在を詠じて、読者を「永遠への思い」に導く。」

カンロ伊勢原③ 「二〇〇年前、天体や宇宙の知識の無かった時代、

「今の月は昔の人をずっと照らしていた」

なんとも哲学的な詩だと思えます。」

第21位 山中問答 (山中問答) 李白

問余何意棲碧山 余に問う何の意ありてか碧山に棲むと

笑而不答心自閑 笑って答えず心自から閑なり

桃花流水窅然去 桃花流水窅然として去る

別有天地非人間 別に天地の人間に非ざる有り

小山洋三郎②「達観、している。」

武田利廣③「なかなか身に付かない漢詩の中国語読みだが、CDで何回かこの詩を聞くと、取り付く島が見つかったような気がした。謫仙人と言われたことの一端を垣間見たような気にさせてくれた。」

第49位 大東（大東） 無名氏（詩経・小雅）

有饑簋飧 有球棘匕
饑たる簋飧あり 球たる棘匕あり

周道如砥 其直如矢
周道は砥の如く その直きこと矢の如し

君子所履 小人所視
君子の履む所 小人の視る所

睠言顧之 潛焉出涕
睠みて言にこれを顧み 潛として涕を出す

安田茂② 「西方から東方の端にある譚国に続く周道は戦車が激しく往来して砥石のように滑らかになっていた。それは征服国家周王朝が他民族を徹底的に搾取した被搾取民族にとっては血と涙の道であった。

この漢詩を読んで、現在の習近平王朝による「一带一路」の収奪の道（国力に不釣り合いな過剰な債務を押し付け、有無を言わず領土の支配権を握る手法）を想起しました。

現在の中共の全体主義は、理念として、チベットで、ウイグルで、HKで、BC1000年～BC250年の周王朝と似たようなことをやっている感じがする。」

第49位 田園樂

(田園樂)

王維

桃紅復含宿雨

桃は紅にして復た宿雨を含み

柳緑更帶春煙

柳は緑にして更に春煙を帶ぶ

花落家僮未掃

花落ちて家僮未だ掃わず

鶯啼山客猶眠

鶯啼きて山客猶眠る

大野若人②「春のゆったりとした情景は、中国らしい隱者の世界を表している。六言絶句だが、リズム感が伴っていると感じる。」

第49位 青玉案 元夕 (青玉案 元夕) 辛棄疾

東風夜放花千樹

東風夜に放さく花千樹

更吹落星如雨

更に吹落として星雨の如し

寶馬雕車香滿路

寶馬雕車香路に満つ

鳳簫聲動玉壺光轉一夜魚龍舞

鳳簫声動りて玉壺光おこ転ずれば一夜魚龍舞う

蛾兒雪柳黃金縷笑語盈盈暗香去

蛾兒雪柳黄金の縷笑語盈盈として暗香去る

眾裏尋他千百度

衆裏に他を尋ぬること千百度

驀然回首那人卻在燈火闌珊處

驀然として回首するに那かの人卻つて在り燈火

の闌珊らんざんたる処に

佐藤三祿②「現在、中国でよく聞かれる詞の曲。

曾ての活動拠点杭州は、三潭印月での夜宴歌舞鉦鼓など派手好きな街の雰囲気、誇り高い知識人達の教養、華麗な年輕姑娘の笑い声などが「元夕」の時代を偲おもはせる。」

第49位 夏夜示外（夏夜外に示す） 席佩蘭

夜深衣薄露華凝

夜は深け 衣は薄く 露華は凝り

屢欲催眠恐未應

屢^{しば}しば眠を催さんと欲して 未だ応ぜざるを恐る

恰有天風解人意

恰も天風の人の意を解する有りて

窗前吹滅讀書燈

窓前 吹き滅す 読書の燈を

駆けつけゾロ② 「うすら寒い夜に、薄着だけで読書に励む夫を気づかう妻の優しさが十分に表現された美しい作品です。

うちの家内に読ませたい一首です。」

第49位 春夜 (春夜) 蘇軾

春宵一刻直千金 春宵一刻直千金

花有清香月有陰 花に清香有り月に陰有り

歌管樓臺聲細細 歌管楼台声細細

鞦韆院落夜沈沈 鞦韆院落夜沈沈

田川行雄② 「北宋の時代の上流階級の様子が見事に表現され、感動を覚える。」

第49位 己亥歳（己亥の歳） 曹松

澤國江山入戰圖 沢国の江山戦図に入る

生民何計樂樵蘇 生民何の計はからいあつてか樵蘇を楽しまん

憑君莫話封侯事 君に憑つて話すこと莫れ封侯の事

一將功成萬骨枯 一將功成つて万骨枯る

一沙鷗② 「一將功成萬骨枯」この一句に集約される現実。今も昔もかわらない。

自分は一將という身分になったこともなければ、功を成したこともない、従つて万骨を枯らすような、凄まじい現実には縁はないつもりですが、誰もが知らない間に、意図せず、人を踏み台にしてしまっているかもしれない……と。」

第49位 挽歌詩

(挽歌詩) 陶潜

有生必有死
早終非命促
昨暮同爲人
今旦在鬼錄
魂氣散何之
枯形寄空木
嬌兒索父啼
良友撫我哭
得失不復知
是非安能覺
千秋萬歲後
誰知榮與辱
但恨在世時
飲酒不得足

生有れば必ず死有^り
早く終うるも命の促まれるにあらず
昨暮は同じく人たりしに
今旦は鬼録に在り
魂氣は散じて何くにか之く
枯形を空木に寄す
嬌兒は父を索めて啼き
良友は我を撫して哭す
得失 復た知らず
是非 安んぞ能く覺らんや
千秋万歳の後
誰か榮と辱とを知らんや
但だ恨む 在世の時
酒を飲むこと 足るを得ざりしを

石川閑生②「人生訓として。」

第49位 紅畔獨步尋花（紅畔獨歩花を尋ぬ） 杜甫

黄四娘家花滿蹊 黄四娘の家花蹊に満ち

千朵萬朵壓枝低 千朵万朵枝を圧して低る

留連戲蝶時時舞 留連せる戲蝶は時時に舞い

自在嬌鶯恰恰啼 自在の嬌鶯は恰恰として啼く

前嶋彩江②「転、結句での蝶や鶯の表現が、大好き。そして大樹の存在が効いている。」

第49位 九日齊山登高（九日齊山に登高す） 杜牧

江涵秋影雁初飛 江は秋影を涵して 雁初めて飛び

與客攜壺上翠微 客と壺を携えて翠微に上る

塵世難逢開口笑 塵世 逢い難し 口を開きて笑ふに

菊花須插滿頭歸 菊花 須く満頭に挿さしはさみて帰るべし

但將酩酊酬佳節 但だ酩酊を將て 佳節に酬いん

不用登臨恨落暉 用いず 登臨落暉を恨むを

古往今來只如此 古往今來 只此如し

牛山何必獨霑衣 牛山 何ぞ必ずしも 独り衣を霑うるおさん

牛山知彦②「重陽の節句ののんびりした風習を教えてください。

「牛山」が詩の中にあり、身近に感じる。

和室の襖にこの詩を書いてある。」

第49位 清明 (清明) 杜牧

清明時節雨紛紛

清明の時節雨紛紛

路上行人欲斷魂

路上の行人魂こゝろを断たんと欲す

借問酒家何處有

借問しやもんす酒家は何れの処にか有る

牧童遙指杏花村

牧童遙かに指す杏花の村

越山② 「絵のようだ。」



杜牧

第49位 函山雜詠其四 (函山雜詠其の四) 夏目漱石

飄然辭故國 飄然として故国を辞し

來宿葦湖湄 来たり宿す 葦湖の湄

排悶何須酒 悶を排すに何ぞ酒を須いん

遣閑只有詩 閑を遣るに只詩有り

古關秋至早 古関 秋至ること早く

廢道馬行遲 廢道 馬行くこと遅し

一夜征人夢 一夜 征人の夢

無端落柳枝 端無くも柳枝に落つ

板本旅石② 「この詩は東京大学に入学したばかりの若き漱石が、箱根を旅したときの作品です。」

第49位 賣炭翁（炭を売る翁） 白居易

伐薪燒炭南山中
滿面塵灰煙火色
兩鬢蒼蒼十指黑
賣炭得錢何所營
身上衣裳口中食
可憐身上衣正單
心憂炭賤願天寒
夜來城外一尺雪
曉駕炭車輾冰轍
牛困人飢日已高
市南門外泥中歇
翩翩兩騎來是誰
黃衣使者白衫兒

薪を伐り炭を焼く南山の中
満面の塵灰煙火の色
両鬢蒼蒼十指黒し
炭を売り錢を得て何の営む所ぞ
身上の衣裳口中の食
憐れむべし身上衣正に単なり
心に炭の賤きを憂え天の寒からんことを願う
夜來城外一尺の雪
曉に炭車に駕して氷轍を輾らしむ
牛困れ人飢ゑて日已に高く
市の南門外にて泥中に歇む
翩翩たる兩騎來たるは是れ誰れぞ
黄衣の使者と白衫の兒

手把文書口稱敕

手に文書を把つて口に勅と称し

迴車叱牛牽向北

車を迴らし牛を叱して牽いて北に向かわしむ

一車炭重千餘斤

一車の炭重さ千余斤

宮使驅將惜不得

宮使驅り將されば惜しむも得かなわず

半匹紅綃一丈綾

半匹の紅綃一丈の綾

繫向牛頭充炭直

繫ぎて牛頭に向かいて炭の直に充つ

小林迪雄②「中唐後半の社会情勢の不平等と不正が横行していた様子が詠われている。身につまされる光景が展開している。」

第49位 過零丁洋（零丁洋を過ぐ） 文天祥

辛苦遭逢起一經	辛苦遭逢一經より起こる
干戈落落四周星	干戈落落たり四周星
山河破碎風拋絮	山河破碎して風絮を抛ち
身世飄搖雨打萍	身世飄搖雨萍を打つ
惶恐灘頭說惶恐	惶恐灘頭惶恐を説き
零丁洋裏歎零丁	零丁洋裏零丁を嘆ず
人生自古誰無死	人生古より誰か死無からん
留取丹心照汗青	丹心を留取して汗青を照らさん

五嶋美代子② 「結句の潔さにジーンとくる。」

第49位 去者日以疎（去る者は日に以て疎し） 無名氏（文選）

去者日以疎

去る者は日に以て疎まれ

來者日以親

來る者は日に以て親しまる

出郭門直視

郭門を出でて直視すれば

但見丘與墳

但丘と墳とを見るのみ

古墓犁爲田

古墓は犁かれて田と為り

松柏摧爲薪

松柏摧かれて薪と為る

白楊多悲風

白楊に悲風多く

蕭蕭愁殺人

蕭蕭として人を愁殺す

思還故里閭

故里の閭に還らんと思ひ

欲歸道無因

歸らんと欲すれども道因る無し

高田宗治② 「この詩は『文選』十九首の中の一詩。

人の逃れることのできない「生と死」を直視した類まれな名詩である。素朴で、淡々とした歌いぶりの中に感傷を誘う言葉を駆使しながらも決して感傷的でないのがよい。」

第49位 平常心（平常心） 無門慧開禪師

春有百花秋有月 春に百花有り秋に月有り

夏有涼風冬有雪 夏に涼風有り冬に雪有り

若無閑事掛心頭 若し閑事の心頭に掛くる無くんば

便是人間好時節 便是れ人間じんかんの好時節

K・A② 「名刹の僧の墨跡を所有している。」

第49位 臨洞庭上張丞相（洞庭に臨み張丞相に上る）

孟浩然

八月湖水平 たいらか
八月湖水 ひた 平なり

涵虛混太清 ひた
虚を涵して太清に混ず

氣蒸雲夢澤 うんぼうたく
氣は蒸す雲夢沢

波撼岳陽城 ゆる
波は撼がす岳陽城

欲濟無舟楫 わた
濟らんと欲するに舟楫無し

端居恥聖明 ちよう
端居聖明に恥づ

坐觀垂釣者 ちよう
坐るに釣を垂るる者を觀て

徒有羨魚情 ちよう
徒らに魚を羨むの情有り

塚田倩子② 「広大な風景。」

第49位 題不識庵擊機山圖（不識庵、機山を撃つつの図に題す） 頼山陽

鞭聲肅肅夜過河

鞭聲肅肅夜河を過わたる

曉見千兵擁大牙

曉に見る千兵の大牙を擁するを

遺恨十年磨一劍

遺恨十年一劍を磨き

流星光底逸長蛇

流星光底長蛇を逸す

竹村文孝② 「母がよく吟じ解説してくれた。」

第49位 送母路上短歌（母を送る路上の短歌）

頼山陽

東風迎母來

東風に母を迎えて来たり

北風送母還

北風に母を送つて還る

來時芳菲路

來る時は芳菲の路

忽爲霜雪寒

忽ち霜雪の寒と為る

聞鷄卽裏足

鷄を聞いて即ち足を裏つみ

侍輿足槃跚

輿に侍して足槃ばん跚たり

不言兒足疲

兒の足の疲るるを言わず

唯計母輿安

唯母の輿の安きを計る

獻母一杯兒亦飲

母に一杯を獻じて兒もまた飲む

初陽滿店霜已乾

初陽店に満ちて霜已に乾く

五十兒有七十母

五十の兒七十の母あり

此福人閒得應難

此の福人じんかん閒得ること応に難かるべし

南去北來人如織

南去北來人織るが如きも

誰人如我兒母歡

誰人か我が兒母じぼの歡びに如かんや

三村公二②「五十の息子が七十の母を東風のそよ吹く京に迎え、そして、北風すさぶ寒空に母を送って故郷に帰るといふ、母を思う子供の心情に満ち溢れた詩で、われとわが身を振り返り、何とも味わい深い。」

第49位 樂遊原（樂遊原） 李商隱

向晚意不適

くれ なんな
晚に向んとして意適わず

驅車登古原

せきよう
車を駆って古原に登る

夕陽無限好

せきよう
夕陽無限に好し

只是近黃昏

こうこん
只だ是れ黃昏に近し

新井治仁② 「転句結句の絶唱に美しさが凝縮している。」



李商隱

第49位 少年行（少年行） 李白

五陵年少金市東 五陵の年少 金市の東

銀鞍白馬度春風 銀鞍 白馬 春風を度る

落花踏盡遊何處 落花踏み尽くして何れの処にか遊ぶ

笑入胡姬酒肆中 笑って入る胡姬の酒肆の中

カンロ伊勢原② 「李白四十三歳にて都長安に居たときの作。大唐長安での若者の姿を生き生きと描いている。

承句の「銀鞍白馬春風を度る」
映画を見ている様な臨場感がある。」

第49位 春夜宴從弟桃花園序（春夜從弟の桃花園に宴するの序） 李白

夫天地者萬物之逆旅 夫れ天地は万物の逆旅にして

光陰者百代之過客 光陰は百代の過客なり

而浮生若夢 而して浮生は夢の若し

爲歡幾何 歡を爲こと幾何ぞ

古人秉燭夜遊 古人燭を秉り夜遊ぶ

良有以也 良に以有る也

況陽春召我以煙景 況んや陽春の我を召すに煙景を以てし

大塊假我以文章 大塊の我を假すに文章を以てするをや

會桃李之芳園 桃李の芳園に会し

序天倫之樂事 天倫の樂事を序す

群季俊秀 群季の俊秀は

皆爲惠連 皆惠連たり

吾人詠歌

吾人の詠歌は

獨慚康樂

独り康樂に慚づ

幽賞未已

幽賞未だ已まざるに

高談轉清

高談転た清し

開瓊筵以坐華

瓊筵けいえんを開いて以て華に坐し

飛羽觴而醉月

羽觴うしやうを飛ばして月に酔う

不有佳作

佳作有らずんば

何伸雅懷

何ぞ雅懷を伸べん

如詩不成

如し詩成らずんば

罰依金谷酒斗數

罰きんこくは金谷の酒斗の數に依らん

G 3 ② 「松尾芭蕉が「奥の細道」冒頭で引用した詩。

李白の詩は、国を超え時代を超えて、現代を生きる私たちにも漂泊の旅へと誘う。」

第49位 約客（客と約す） 趙師秀

黃梅時節家家雨

黃梅の時節かか家家の雨

青草池塘處處蛙

青草の池塘処かかの蛙

有約不來過夜半

約有るも來たらず夜半を過ぐ

閑敲棋子落燈花

閑に棋子を敲けば灯火落つ

高橋純子③ 「こんな詩が作れるようになりたいと、ため息が漏れた詩。何とも言えない余韻が漂います。詩の組み立て方や、一瞬を切り取る、とはこういう事なのだなぁ、と勉強になった詩です。」

五柳道人③ 「私の趣味は漢詩と碁である。漢詩は始めて十年弱であるが、碁は約七十年近く楽しんでいる。いつか碁の漢詩を作りたいというのが夢である。2年前に出会ったのがこの詩で、そろそろこのような詩作に挑戦という気にさせてくれた。」

第49位 春曉 (春曉) 孟浩然

春眠不覺曉 春眠曉を覺えず

處處聞啼鳥 処処啼鳥を聞く

夜來風雨聲 夜來風雨の聲

花落知多少 花落つること知る多少ぞ

谷戸山民③「学校で遅刻を叱られたら「春眠曉を覺えず」と先生に言い逃れせよと教わったが、遂に使うチャンスは無かった。

五絶なので中国語の朗読練習にテープで繰り返し、お馴染みの名作です。」

メイ・スズラン③「一句目 春の眠りの心地良さ、今はもうそんな心地もなく、夜中に目覚めて、ラジオの深夜便を聞いて寝覚めの悪い日々。

「春眠曉を覺えず」に戻りたい。」

第72位 感事（事に感ず） 于瀆

花開蝶滿枝 花開けば 蝶枝に満つ

花謝蝶還稀 花謝すれば 蝶還た稀なり

惟有舊巢燕 惟だ 旧巢の燕有つて

主人貧亦歸 主人貧しきも 亦た帰る

室橋幸子③ 「花になぞらえ、人生を感じる。」

第72位 酌酒與裴妣（酒を酌んで裴妣に与う） 王維

酌酒與君君自寬 酒を酌んで君に与う君自ら寛ゆるうせよ

人情翻覆似波瀾 人情の翻覆は波瀾に似たり

白首相知猶按劍 白首そうちの相知すら猶お劍を按じ

朱門先達笑彈冠 朱門の先達は彈冠を笑うらう

草色全經細雨濕 草色は全く細雨を經うるおて湿い

花枝欲動春風寒 花枝は動かんと欲して春風寒し

世事浮雲何足問 世事浮雲何ぞ問しうに足らん

不如高臥且加飡 如しばら高臥して且く飡さんを加えんには

牛山知彦③「試験に落ちた親友を慰める詩。

世の中に憤懣やるかたない友に対しての思いやりが心地いい。」

第72位 鹿柴（鹿柴） 王維

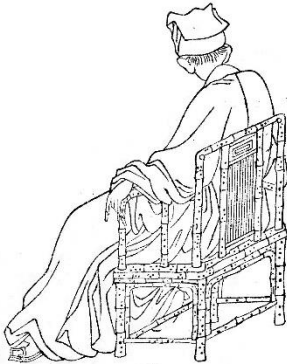
空山不見人 空山人を見ず

但聞人語響 但だ人語の響を聞く

返景入深林 返景深林に入り

復照青苔上 復た照らす青苔の上

上田尤子③ 「静けさの表現が魅力的」



王維

第72位 新嫁娘 (新嫁の娘) 王建

三日入厨下 三日厨下に入り

洗手作羹湯 手を洗こいて羹湯こうとうを作る

未諳姑食性 未だ姑この食性を諳こんぜず

先遣小姑娘 先しず小姑しょうこをして嘗あめしむ

佐藤三祿③「令和2年3月1日に日本書道美術館の「唐詩百選展―書で味わう唐詩の情景」展でたまたまこの詩の書に会い、初々しい可愛さの中に心計を巡らす機知が痛快で漢詩を見直しました。」

第72位 回郷偶書（郷きょうに回りかえて偶たまたま書しよす） 賀知章

少小離家老大回 少小家を離れて老大にして回かえる

郷音無改鬢毛衰 郷音改まる無く鬢毛衰う

兒童相見不相識 兒童相見るも相識らず

笑問客從何處來 笑つて問う客かく何處より來ると

五嶋美代子③ 「器が大きいというのはこういう人のことだと思う。なんか落ち着く。」

第72位 黄鶴樓 (黄鶴楼) 崔顥

昔人已乘黄鶴去 昔人已に黄鶴に乗りて去り

此地空餘黄鶴樓 此の地空しく余す黄鶴楼

黄鶴一去不復返 黄鶴一たび去つて復た返らず

白雲千載空悠悠 白雲千載空しく悠悠

晴川歷歷漢陽樹 晴川歴歴たり漢陽の樹

芳草萋萋鸚鵡洲 芳草萋萋たり鸚鵡洲

日暮鄉關何處是 日暮郷関何れの処か是なる

煙波江上使人愁 煙波江上人をして愁えしむ

三村公二③「李白をして黄鶴樓の詩は崔顥の詩に尽きると言わしめ、黄鶴樓そのものを詠った詩は作らなかつたという程の傑作中の傑作である。伝説をうまく読み込んであり、一層の旅愁を搔き立てる。

今般、コロナですっかり有名になったのは何とも皮肉である。」

第72位 將東遊題壁（將に東遊せんとして壁に題す） 积月性

男兒立志出鄉關 男兒志を立てて郷関を出づ

學若無成死不還 学若し成る無くんば死すとも還らず

埋骨豈惟墳墓地 骨を埋むる豈惟に墳墓の地のみならんや

人間到處有青山 人間じんかん到處有処青山あり

香取和之③「これぞ男の立志、生き様という感。」

第72位 偶成 (偶成) 朱熹

少年易老學難成 少年老い易く学成り難し

一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んず可からず

未覺池塘春草夢 未だ覺めず池塘春草の夢

階前梧葉已秋聲 階前の梧葉已に秋声

竹窓③ 「宋時代は中国のルネッサンスと言われる。四書五経を再興した朱熹の意気込みがうたわれている。教育の重要性を詠ったこの詩はいつの時代にも歌われるべきであろう。」

第72位 胡笳歌送顔真卿使赴河隴 (胡笳の歌、顔真卿の使して河隴に赴くを送る)

岑参

君不聞胡笳聲最悲 君聞かずや胡笳の聲最も悲しきを

紫髯綠眼胡人吹 紫髯綠眼の胡人吹く

吹之一曲猶未了 之を吹いて一曲猶お未だ了らざるに

愁殺樓蘭征戍兒 愁殺す樓蘭征戍の兒

涼秋八月蕭關道 涼秋八月蕭關の道

北風吹斷天山草 北風吹断す天山の草

崑崙山南月欲斜 崑崙山南月斜めならんと欲す

胡人向月吹胡笳 胡人月に向かい胡笳を吹く

胡笳怨兮將送君 胡笳の怨み將に君を送らんとす

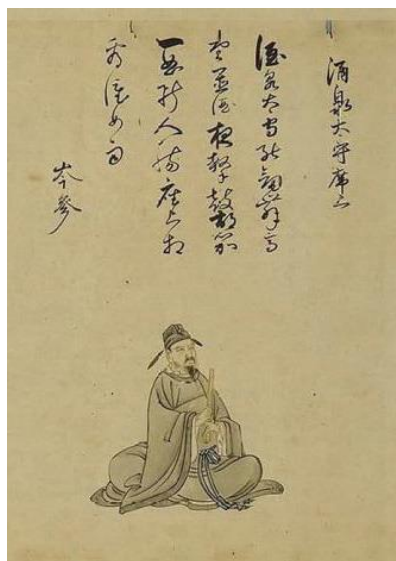
秦山遙望隴山雲 秦山遙かに望む隴山の雲

邊城夜夜多愁夢 辺城夜夜愁夢多し

向月胡笳誰喜聞

月に向かい胡笳誰か聞くを喜ばん

二期生某③「異邦人の吹く胡笳の悲しい調べ、遠き崑崙の峰に掛かる月、これより隴山の辺城に赴かむとする朋友顔眞卿…。
凄然たる作者の心境が読者の脳裡に鮮明に映し出される。」



岑参

第72位 圍碁 (囲碁) 菅原道真

手談幽靜處 手もて談らう 幽靜の処

用意興如何 意を用いること 興如何

下子聲偏小 子を下すこと 声偏に小さし

成都勢幾多 都を成すこと 勢幾ばくか多き

偷閑猶氣味 閑を偷みて 猶お氣味あり

送老不蹉跎 老いを送りて 蹉跎たらさず

若得逢仙客 若し仙客に逢うこと得ませば

樵夫定爛柯 樵夫定めて 柯おののえを爛さまし

板本旅石③ 「私が好きなものは、旅と囲碁です。唐の漢詩人は、杜甫、王維、白居易、劉禹錫、元稹、杜牧、李商隱など著名な詩人で碁を打たなかった人を探すほうが難しいくらい碁を打ち、囲碁の漢詩を詠っている。日本の漢詩人でも沢山囲碁の漢詩を詠っています。この菅原道真の詩は、ずばり囲碁という詩題で詠っています。」

第72位 望月懷遠

(月を望み遠きを懷う)

張九齡

海上生明月

海上 明月生じ

天涯共此時

天涯 此の時を共にす

情人怨遙夜

情人 遙夜ようやを怨み

竟夕起相思

竟夕きょうせき 起きて相い思ふ

滅燭憐光滿

燭を滅するままに光の満つるを憐み

披衣覺露滋

衣はを披りて露の滋おきを覺ゆ

不堪盈手贈

手に盈みたして贈るに堪えず

還寢夢佳期

還た寢て佳期を夢みん

森谷正彦③ 「遠隔の地に在る恋人を思う若者の気持ちをよく表している。」

第72位 歸去來兮辭（歸去來兮辭） 陶潜

歸去來兮

かえりなんいざ
歸去來兮

田園將蕪胡不歸

田園將に蕪あれなんとす 胡ぞ帰らざる

既自以心爲形役

既に自ら心を以つて形かたちの役しよべと爲す

奚惆悵而獨悲

奚ぞ惆悵として独り悲しむや

悟已往之不諫

已往の諫いさむまじきを悟り

知來者之可追

來者まじしの追みちう可きを知る

實迷途其未遠

實まじしに途みちに迷うこと其れ未だ遠からず

覺今是而昨非

今ぜの是にして昨は非なるを覺りぬ

舟搖搖以輕颺

舟揺揺として以つて輕く颺あがり

風颺颺而吹衣

風颺颺として衣を吹く

問征夫以前路

征夫に問うに前路を以つてし

恨晨光之熹微

晨光の熹微なるを恨む

（これも詩ではないが、投票があり掲載した。最初の十二行のみで以下略。）

石川閑生③ 「人生観として。」

第72位 貧交行（貧交の行） 杜甫

翻手作雲覆手雨 手を翻せば雲と作り手を覆えば雨となる

紛紛輕薄何須數 紛紛たる輕薄何ぞ数うるを須いん

君不見管鮑貧時交 君見ずや管鮑貧時の交わり

此道今人棄如土 此の道今人棄てて土の如し

K・A③ 「詩吟大会でこの詩を吟題に選び入賞した。」

第72位 無題 大正五年八月四日夜（無題） 大正五年八月四日夜） 夏目漱石

幽居正解酒中忙 幽居 正に解す酒中の忙

華髮何須住醉郷 華髮 何ぞ須いん醉郷に住むを

座有詩僧閑拈句 座に詩僧有りて 閑に句を拈し

門無俗客靜焚香 門に俗客無くして 静かに香を焚く

花閒宿鳥振朝露 花間の宿鳥 朝露を振り

柳外歸牛帶夕陽 柳外の帰牛 夕陽を帯ぶ

隨所隨縁清興足 所に隨い縁に隨いて清興足る

江村日月老來長 江村の日月 老來長し

蔦清昭③「起聯 幽居正解酒中忙

華髮何須住醉郷

酒は好きだけど、この歳になると静かに飲みたいよね、と相槌を打ちたくなる。」

第72位 金州城下作（金州城下の作） 乃木希典

山川草木轉荒涼 山川草木轉た荒涼

十里風腥新戰場 十里風腥し新戰場

征馬不前人不語 征馬前まず人語らず

金州城外立斜陽 金州城外斜陽に立つ

鈴木正敏③ 「大連は金州の大激戦で、多数の将兵と長男勝典を失くした悲情が見事。石川先生の解説を読み、聞きさらに興味が出てきた、日本人漢詩作家の代表作の一つ。」

第72位 武野晴月

ぶや せいげつ
(武野の清月)

林羅山

武陵秋色月嬋娟

武陵の秋色

月嬋娟せんげん

曠野平原晴快然

曠野平原 晴れて快然たり

輾破青青無轍迹

青青を輾破てんぱするも 轍迹てっせき無し

一輪千里草連天

一輪千里 草天くそに連なる

前嶋彩江③ 「晴れ渡った空にかかるこの月とともに、
気持ちが清々とする詩である。」

第72位 雪梅（雪梅） 方岳

有梅無雪不精神 梅有りて雪無ければ精神ならず

有雪無詩俗了人 雪有りて詩無ければ人を俗了す

薄暮詩成天又雪 薄暮詩成つて天又雪ふる

與梅併作十分春 梅と併せ作す十分の春

堀端保聖③「天の雪、地の梅、人の詩という三つの要素が春を味わうためには必要であるとした機知の詩である。」

第72位 夏夜追涼（夏夜涼を追う） 楊萬里

夜熱依然午熱同

夜熱依然として午熱に同じ

開門小立月明中

門を開いて小立す月明の中

竹深樹密蟲鳴處

竹深く樹密なり虫鳴く処

時有微涼不是風

時に微涼有り是れ風ならず

一匹の小さな虫に神経を集中して涼しさを表現しているのが心憎いほどである。」
③「蒸し暑い静かな夜に作者は、月明かりに照らされた草むらで鳴く、

第72位 馬詩 其五（馬詩 其の五） 李賀

大漠沙如雪

大漠 沙すな 雪の如く

燕山月似鉤

燕山 月こ 鉤に似たり

何當金絡腦

何いつかまさ當らにら絡腦くのうを金きんにして

快走踏清秋

快走 清秋に踏むべき

忍冬③「鉤月下、雪のように白い砂漠を疾走する駿馬の姿は、静謐で神秘的な東山魁夷の画を想起させる。静謐さの中でスピード感を表出するにはどんな絵画的構図をとるべきか？ と想像する楽しみが尽きない！」

第72位 憫農

(農を憫む) 李紳

其一

春種一粒粟

春には種うう一粒ひとつぶの粟もみ

秋收萬顆子

秋には収ばんかむ万顆みの子

四海無閑田

四海かんでん閑田無なきも

農夫猶餓死

農夫猶なお餓う死しす

其二

鋤禾日當午

禾いねを鋤すいて、日ひ午ごに当ある

汗滴禾下土

汗あせは滴たる禾か下かの土

誰知盤中餐

誰たれか知しらん盤ばん中ちゆうの餐

粒粒皆辛苦

粒りゅうりゅう粒りゅうりゅう皆みな辛しん苦くなるを

香川龍③「座右銘、

子供の時代から覚えている漢詩です。」

第72位 春夜洛城聞笛（春夜洛城に笛を聞く） 李白

誰家玉笛暗飛聲 誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす

散入春風滿洛城 散じて春風に入つて洛城に満つ

此夜曲中聞折柳 此の夜曲中折柳を聞く

何人不起故園情 何人か故園の情を起さざらん

大村うさ太郎③ 「故郷を憶う気持ち私が私を代弁してくれている様な気がします。」

神奈川県漢詩連盟創立15周年記念

わたしの好きな漢詩

令和三年アンケート結果

発行 2021年9月1日

編集 神奈川県漢詩連盟

15周年記念行事企画委員会